

海ほおずき

小川未明

青空文庫

梅雨つゆのうちに、花はなという花はなはたいていちつてしまつて、雨あめが上あがると、いよいよ輝かがやかしい夏なつがくるのであります。

ちようどその季節きせつでありました。遠とおい、あちらにあたつて、カン、カン、カンカラカンノカン、……という磬けいの音おとがきこえてきました。

「また、あのお祭りまつの時節じせつになつた。ほんとうに月日つきひのたつのは早いはやものだ。」と、お母かあさんはいわれました。

あや子こはある日ひのこと、学校がっこうの帰かえり途みちに、その小ちいさなお寺てらの境けい内だいにはいつてみました。するとそこには、いろいろの店みせがでていました。そして、子供こどもらがたくさん、どの店みせの前まえにも集あつまつ

ていました。赤い風船球あかふうせんだまを売うっているのや、あめ屋や、またおもちゃなどを売うっているのが目めにはいりました。

あや子こはそれらの前まえを通りぬけて、にぎやかなところから、すこしさびしい裏通りうらどおに出でようとしますと、そこにも一人ひとりのおばあさんが店みせを出だしていました。やはり、駄菓子だがしやおもちやの類るいに、そのほか子供こどもの好きすそうなものならを並べていました。あや子こは、べつにそれまではなにもほしいとは思おもいませんでした。ただ、いろいろな店みせの前まえを過すぎて、それらをながめてきたのでありますが、いま、おばあさんの店みせの前まえにさしかかって、ふと歩あゆみを止とめたのであります。

それは、一つのさらの中なかに、海ほおずきうみがぬれて光ひかっていたか

らであります。

あや子^こは、これがなんというものであるか知ら^しなかつたのです。ほおずきであろうとは思^{おも}ったけれど、かつてこんな珍^{めづら}しいものは、見^みたことがなかつたからです。

「おばあさん、これはなんというものですか。」と、あや子^こはほおを染^そめながら、店^{みせ}に腰^{こし}をかけていたおばあさんにききました。

おばあさんはもう、頭^{あたま}の髪^{かみ}の毛^けがだいぶ白^{しろ}くなっていて、人^{ひと}のよさそうなおばあさんでありましたから、あや子^こはつい、そういつて聞^きく気^きになつたのでした。

「これですか、海^{うみ}ほおずきですよ。ここらでは、めつたに売^うつていませんよ。」と、おばあさんは答^{こた}えました。

あや子は、家へ帰つてからお母さんの許しを受けて、買おうと思いましたが、それで、途すがらも海ほおずきのことを、頭の中で考えながら歩いてきました。

彼女は、あのたんぽにできる真紅なほおずきよりは、どんなに、この、海にある珍しいほおずきを、ほしいと思つたかしれませんでした。

「お母さん、海ほおずきを買つてきてもよろしゅうございますか。」と、あや子はお母さんにいいました。

「おまえがそんなにほしければ、用事をしまつたらいつておいでなさい。」と、お母さんはいわれました。

あや子が用事をすましますと、かれこれ晩方になつたのであ

ります。しかし、毎日まいにち、学校がっこうへゆく途みちすがらであり、また町まちつづきでありますから、急いそいでいってこようと家うちを出でかけたのです。

さつきまで、よく晴はれていた空そらが、いつのまにか曇くもっていました。そして、もうすぐお寺てらが間近まぢかになった時じぶん分に、ぽつり、ぽつりと雨あめが落おちてきました。

あや子こは帰かえろうかと思おもいましたが、せつかくここまできて、買かわずに帰かえるのが残ざんねん念ねんだという気きがしましたので、急いそいでお寺てらへゆきますと、もういろいろな店みせは、片かたづきかけています。

おばあさんの店みせはと思おもって、あや子こはさつそくそのお店みせまでゆきますと、おばあさんも片かたづけていました。

「海ほおずきをおくんなさい。」と、あや子はせきこんでいいました。海ほおずきのはいつていたさらは、もうそこには見えませんでした。

「おお、海ほおずきは、もうこの箱の底のほうにしまいましたよ。」と、おばあさんは答えました。あや子はがっかりしました。

そのうちに、雨がだんだん降ってきました。おばあさんは、あわてて箱の中へ残りの品物を入れていきます。あや子は、おばあさんが気の毒になって、自分の急いで帰らなければならぬことも忘れて、おばあさんにてつだつてやりました。おばあさんはいそう喜びました。

やがてそれらの箱を小さな車に積んで、おばあさんはみすぼら

しいふうをして、その車をだれも助けてくれるものもなく、一人
 で引いて、暗い道を帰ってゆくのです。そのとき、おばあさんは
 あや子を振り向いて、

「私の家は、この道をどこまでもまっすぐについて、突き当たつ
 たら左に曲がって、一丁ばかりゆくと車屋がある。それから四
 軒めの家です。海ほおずきがたくさんありますよ。」といいまし
 た。あや子はしばらく立つて、おばあさんのゆくのを見送ってい
 ました。そして、家に帰る時分には、もう町には燈火がついて、
 銀のような雨が、そんなにひどくはなかつたけれど、降つていま
 した。

あくる日もやはり雨が降っていました。

カン、カン、カンカラカンノカン、……と雨あめの中なかに、遠とおく磬けいをたたく音おとがきこえていました。

そのつぎの日ひには、雨あめが晴はれて、めつきり暑あつくなりましたが、もうお祭りまつは終おわってしまつて、あや子は学こ校がっこうの帰かえりに、そのお寺てらの境けい内だいを通とりましたけれど、なんの店みせもなかつたのです。ただ青あお々あおとした木立こたちが、空そらにしげっていました。

しかし、彼女かのじよはどうしても海ほおずきを目めから忘わすれることができませんでした。家うちに帰かえつてもそのことばかり思おもい出だしていました。

「お母かあさん、あのおばあさんの家うちへ、海ほおずきを買かいにいつてきてはいけませんか。」と、ある晩ばん、たまりかねてききました。

するとお母かあさんは笑わらいながら、

「その家うちがわかつているならいつておいで。しかし、おまえ一人ひとりではいけないから、ねえやをいっしょにつれておいでなさい。」
といわれました。

あや子こは喜よろこんで女じよちゆう中ちゆうをつれて、二人ふたりはいっしょにおばあさんうちの家うちをたずねてゆきました。

いい月夜つきよでありました。二人ふたりは長ながい長ながい町まちを歩あるいてゆきました。だんだんゆくにつれて場末ばすえになるとみえて、町まちの中なかはさびしく、人ひと通とおりも少すくなく、暗くらくなつてきました。けれどもまだ宵よいのうちで、どこの家うちも起おきています。

やっと二人ふたりは、その町まちはずれに突つきあたりました。それから左ひだり

に曲まがりました。なるほど、おばあさんのいったように、一丁ちようばかりゆくと一軒けんの車くるま屋やがありました。このあたりは、どの家うちも狭せまく、汚きたなく、屋根やねが低ひくうございました。

あや子は車くるま屋やから四軒けんめの家うちを数かずえてゆきますと、その家うちは、はや、戸とが閉しまっていました。が、戸とのすきまから燈火あかりがさして
いました。

「今こんばん晩ばんは、今こんばん晩ばんは。」と、あや子こと女じよ中ちゆうは、かわるがわるにいつて、その戸とをたたきました。するとやつと、ことごとひとと人ひとの出でてくるけはいがしました。そして戸とが開あいて、
「だれですかえ。」と、頭あたまの髪かみの白しろいおばあさんが顔かおを出だして
いました。

「海ほおずきをおくんなさい。」と、あや子はいいました。

「どこからおいでなすつたの。」と、おばあさんは目をくしやくしやさしてききました。

「おばあさん、私ですよ。いつかお祭りのとき雨が降つて買われなかつたので、今晚買いにきたのです。」と、あや子は答えました。

「あ、そうですか。」と、おばあさんは思い出したとみえて、うなずきました。そして、そのまま奥へはいりました。二人は外の戸口のところに待っていますと、おばあさんは、海ほおずきの一かたまりになっているのをつまみ出して、安くあや子に売つてくれました。二人は大喜びでありました。そして、その家から

でて、また長い町を歩いて家へ帰りますと、夜もいつしか更けて
いました。

お父さんやお母さんまでが、その海ほおずきを珍しがって、手
にとってながめられました。あくる日、あや子は学校へ持って
いって、お友だちにも分けてやりました。

その年の夏も暮れてしまったのです。お母さんのおつしやられ
たように、月日のたつのはほんとうに早いものです。

また夏がめぐってきました。するとあや子は、去年買った海
ほおずきのことを思い出しました。ある日、あや子はおばあさん
の家をたずねてゆきました。車屋から四軒めの家をさがします
と、そこは綿屋になって、ほかの若い人たちが住んでいました。

お祭りまつりの日ひになりました。磬けいの音おとが遠とおくあちらできこえました。あや子こはある晩ばん、おばあさんがまた店みせを出だしてないかと思おもつて、お寺てらの境けいだい内ないへきてみますと、去きよ年ねん出でたようないろいろの店みせはありました。おばあさんの姿すがたは、やはり見みえませんでした。そして、いつかおばあさんの店みせを出だしていた場所ばしょには、知しらぬ背せの高い男たかおとこが、ダリアを地面じめんにたくさん並ならべていました。カンテラの火ひは、それらのダリアの花はなを照てらしていました。中なかに、黒くろいダリアの花はなが咲さいていました。

あや子こは家うちへ帰かえつてからも、なおその花はなが目めについていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「海《うみ》ほおずき」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

海ほおずき

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>